

#### 4. プロトンポンプインヒビター投与後の維持療法の検討—特に内分泌細胞について—

(内科学第四) 水口泰宏、三輪一彦、堀部俊哉、河合隆、角谷宏、新戸慎哲、関知之、山田孝史、池田肇、斎藤利彦  
 前回我々は、ラットにプロトンポンプインヒビター(PPI)を長期投与することにより内分泌細胞の増加が起こる事を報告した。今回ラットを用い、PPI長期投与後無処置群(A)と、PPI長期投与後H<sub>2</sub>-blocker投与群(B)の2群を設定し、PPI長期投与後の維持療法に関する基礎的検討をした。血清ガストリン値は、B群がA群に比べ上昇していた。さらに、幽門腺粘膜内ガストリン細胞数および胃底腺粘膜内グリメリウス陽性細胞数は、B群がA群に比べ、有意に上昇していた。以上より、PPI長期投与後、維持療法としてH<sub>2</sub>-blocker投与する事により、内分泌細胞への影響が継続する可能性があり、注意を要する点と思われた。

#### 5. 尿崩症で発症したリンパ球性下垂体炎の1例

(脳神経外科学) 朱田精宏、西岡宏、和田淳、三木保、伊東洋

<症例>33才、産褥婦。主訴は視力視野障害、多尿。家族歴は同胞に慢性関節リウマチ、慢性甲状腺炎あり。現病歴は結婚6年目で初妊娠。正常満期分娩5日後より急速な左視力低下と口渴、多尿出現。当院紹介され下垂体部病変を認めためめ分娩約一ヵ月後当科入院。入院時所見では中枢性尿崩症と左視力低下、両耳側半盲と前葉機能低下を示した。また腫瘍マーカー、免疫系、抗下垂体抗体、抗核抗体はいずれも陰性。トルコ鞍拡大なくCT、MRIで鞍上部進展した著明にエンハンスされる病変を認めた。症状および病変部の軽快が得られないため経蝶形骨洞的摘出術施行。病理所見は、繊維化の強いリンパ球が主体のリンパ球性下垂体炎と診断され術後視力視野、尿崩症は改善した。

<結語>本疾患は下垂体腺腫と画像上鑑別困難な自己免疫性疾患であり、本例のように自然寛解が得られない繊維化の強い場合は確定診断および治療を目的に経蝶形骨洞的摘出術が第一選択と考えられた。

キーワード リンパ球性下垂体炎 尿崩症 妊娠

#### 6. 内分泌化学療法により完全寛解が得られた肺転移を伴った進行乳癌の1例

(外科学第三) 武田秀之、木村幸三郎、小柳泰久、日馬幹弘、中村祐子、林幹也

乳癌は補助療法に奏効しやすいが、遠隔転移を生じた症例がCRを得ることは困難である。肺転移を伴った進行乳癌に対し、術後強力な内分泌化学療法を施行し完全寛解を得て、2年後の現在も維持している症例を経験した。症例は55歳の女性で乳頭陥凹を主訴に来院した。両側肺に多発転移を認めた。非定型的乳房切断術を行いMPAの内分泌療法を開始し、化学療法としてCAF変法を10クール施行した後、肺病変は消失し腫瘍マーカーも正常範囲内にある。内分泌療法の有効率は約50%といわれるが、MPAには食欲増進、骨髄保護作用があり副作用の強い制癌剤との併用が可能である。我々は、同療法で4例の肺転移に対しCRを得ている。化学療法を併用し遠隔転移に対しても奏効を得ることが可能である。